

## こどもとおとなのコウゲイカン

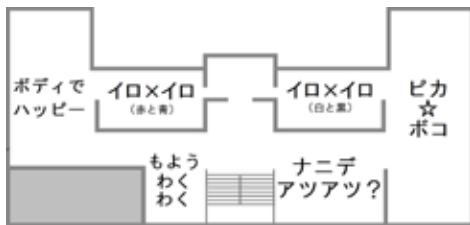
今井陽子

子どもには工芸の鑑賞はむずかしいのではないか。そんな声をうけて「こども工芸館」と冠した鑑賞プログラムを始動させたのは二〇〇二年夏のこと。しかしフタを開けてみれば大人の思惑や心配など軽々と越え、子どもたちは深く鋭く工芸に迫っていきました。中でもワークシートの公開プログラム「みんなで作る工芸図鑑」での成果は、大人の鑑賞を揺るがしかねないものばかり。「図鑑カード」と呼ぶワークシートで彼らの眼が切り取った工芸のなんとみずみずしく、魅力的なこと！本稿でもいくつか紹介したとおり、たとえ無邪気な言葉でも「ちゃんと見た？」と語りかけ、そのせいか子どもたちのカードの前から妙に真顔、そして急ぎ足で会場に戻る大人たちをしばしばみかけるのです。

本展は子どもと一緒に取り組んだ過去のテーマを再構成しました。どれも日頃工芸から直感的に享受していることで、どちらかというと右周りルートは素材や技法、またその結果として生まれた質感の効果を、左周りルートでは作品の構成要素にこめられた意味をフォーカスします。

ナニデアツアツ？

壺や布、箱などの機能的形式において、感情移入はどのように発生するでしょうか。その噴出に際して聞く言葉の一つが「ナニデアキテルノ？」——特に子どもたちの鑑賞の



展示プラン

現場では、対象への関心は単純すぎるくらいにまっしぐら。同時に脳内データでは必ずぐに解を得ない眼前の「異物」に興奮し、畏敬の念さえ抱く子どもしばしば見かけます。ここで確認したておきたいのは、そうした反応がアニメイズムによって引き出されたのではないということ。心を捉えた物質感がかたちを作り上げている、行為の結実にグッときているようなのです。銀鍛造による関谷四郎《線瓶》（一九七四年）を見た十二歳が残したコメントをご紹介します。「レモン色とかげの色合いの間にうっすら見えるシマシマ、また、かげの間にみえる光。ただのつやつやのびんではなく、シマシマによって美しい光とかげの色合いができています点」。

工芸家にとって自身が選んだ素材技法の掛け合いは、伝統的形式、あるいは機能をもたないいわゆるオブジェと呼ばれる造形においても他に代えがたい事柄です。イメージを投入する都度、物理化学的に可能となる範囲を矯めつめつ挑み続ける緊張感が作品の魅力を深めています。「図鑑カード」には作り手の姿勢を意識した言葉も散見しますが、中には「よくやった」と書いた子どももいました。まったく油断なりません。

ピカ☆ポコ

工芸鑑賞の場ではさまざまなオノマトペが飛び交います。軽くとられがちなオノマトペですが、それが出てきた理由を探ってみると、言葉の響きやリズム、ときには語源において作品のエッセンスを直感的に掴む例も少なくありません。ホットワークと呼ばれるガラスの熱間加工によるスリリングなアクションの結実を子どもたちはどう受け止めたでしょうか？対話形式のガイドプログラム「タッチ&トーク」でガラス作品をさりながら「チュルチュル」と教えてくれた子がいました。「ツルツル、だけどもっと、なんかチュルチュル」。ホットワークによるみずみずしい表面を捉えたこのオノマトペ、そして「なんか」というためらいのワンクッションを、ガラスが固体か液体か長年研究している科学者たちの評価を聞いてみたい気がします。

歴史や地域性、思想的背景など、工芸を成立させる経緯は多種多様ですが、この部屋ではそうしたことを一度手放して作品と向き合ってください。思わずこぼれたオノマトペには、きっと皆さんの視る力が息づいています。

イロ×イロ（白と黒）

「図鑑カード」に取り組む子どもたちにとって物質感が干渉する光と影の効果はやは

りたまらないものらしく、その傾向が顕著となる例に「漆黑」への挑戦があります。黒といえは一般的には光のないさまをイメージさせますが、漆の黒の場合は素材の物性が光を反射させるという論理矛盾が発生します。既知の黒と目の前の現象とのあいだを埋めようと、黒の色鉛筆一本で塗り込めるためにときどきカードの余白まで真っ黒になります。グリグリとした筆圧でツヤ出しに挑むもあり、そのせいか、工芸館で用意している色鉛筆は黒から短くなつていくのです。

一方の白で子どもたちを奮わせたものに絹があります。絹は繊維の断面が三角形になっていて、プリズムのように光を複雑に反射させる状況が刺激となったようです。特に極薄の生地は光り、かつ透明という要素で心を捉え、漆黑のときは真逆に細くかすかに震えるほど弱い筆致で、しかし確実に線を追う離れ技で作品への理解を示しました。

#### イロ×イロ(赤と青)

暖色の呼び名のとおり、その一つである赤に温かさを覚える人は多いのですが、ピンクやオレンジと比べてイメージする熱量はより高く、その印象は感情面への作用においても同様です。富本憲吉の《色絵金銀彩羊歯文八角箱》(一九五九年)に「キレイな赤が元気を出す」とコメントした十一歳がいました。みっちり描き込まれた羊歯文から視く分量はそれほど多くないのに、金属の硬質な光に温かさを添え、その輝きを増して見せた赤のエネルギーをたしかに受け取ったのです。人形作家の吉田良が《すぐり》(一九八六年)に緋色の縮緬地着物をまとわせたのも効果的でした。ただしここでは元氣いっばいの象徴ではなく、視覚的に迫って感じ、血の記憶とも結びつく赤ゆえに、よけいにゾクッとさせられるようです。

一方、寒色グループの代表である青は言葉と色彩の連想調査で「平静」の一位を獲得しましたが、停滞とは一線を画したこれもまた気持ち動かしやすい色です。それは視線を奥へと誘うこと、また海や空との連想から広がりや高さのヴィジョンを開くためです。この色名を冠するやさしいものである青磁は古代中国に起源をもち、釉薬に含まれる鉄分が還元することで美しい青に発色します。美しいと簡単に書いたものの、思い描く美しい青は人によってさまざま。古来難しいと言われた青磁も現代では技術の解明が進みましたが、いくら諸条件を整えても窯を開けるまでは分からない。ロマンの絶える日は遠そうです。

#### ボダイでハッピー

ヒトガタを目にするとドキッとしませんか？奇妙なことにどんなに小さくてもやっぱドキッと。むしろサイズなど飛び越えさせるくらい、ヒトガタは人の心情を誘い込む。そのため、はじめは形代として呪術的に用いられたものも次第に作り込みと装飾性が高まって、調度の仲間入りを果たした姿を今日まで伝えていきます。

「ハッピー」は、二〇一七年にこの調度という概念を子どもたちとシェアしようとして浮かんだキーワードでした。調度は身の回りの品々を指し、部屋に置く、しつらえる行為によって現状をプラス方向に動かそうとする物理と心理の働きが根底にあります。「色どりがいいし、形ももうもぜんぶがビューティフル」と絶賛された初代宮川香山《色入菖蒲図花瓶》(一八九七―一九二二年頃)をこの部屋に並べました。「花を入れなくても、きれいに見えるくらいきれい」で「これを見ると、げんきに、なれます」というコメントどおり、居室をハッピーにする力のみなざる作品です。

#### もようわくわく

一個の円。あるいは線一本。どちらも非の打ち所がない基本形ですが、二つ、三つと並べていくとリズムが生まれ、心をざわめかせます。動いた心はそれを引き起こした対象との距離を測りはじめ、水玉や立涌など多彩な名前が与えられました。幾何学図形でさえそうなので、花や動物の姿にときめく人も多いでしょう。文字や日用品、化学変化の現象に惹かれる場合もあるかもしれません。模様はそうしたものの一切合財まとめて引き受け、私たちの世界を彩り、豊かにしてくれます。組み合わせは自由自在。しかも奥底にはモチーフとなったものに備わる力を借りて幸あれと願う気持ちがかめられている。それが模様です。

二〇一四年にこの章と同じ名前の展覧会を開いた際、子どもたちの注目を特に集めた一点を部屋の中央に置きました。本展のポスターをご覧いただけただけでしょうか？大きく紹介した絵は六歳の来館者が「図鑑カード」に描いてくれたものです。当時のセルフガイドで円環による増幅する視覚的エネルギーの効果には触れたけれど、まさかあのよう飛び出すなんて。その子のコメントはただひと言「かぜみたいだった」……五年経ったいまも「みる」意欲をかきたてられる思いがします。

(工芸課主任研究員)